

東亞醫學

第三十號要目

◆投稿規定◆

讀者各位の投稿を歓迎す。

題目、内容は時事、學術、文藝其他隨意。

長さは一〇〇〇字以下とす。

○鍼灸の發生に關する一考察 龍野 一雄

○黃疸の治驗 龍野 一雄

○黃疸の治療法

○治療實例 大塚敬節譯(葉橋泉著)

○蘇州の名醫葉橋泉氏を訪ねて 本多 精一

○治方看的 荒木 性次

先哲醫訓復唱

古人之診病也、視彼不以彼、乃以彼爲我、其既無彼我之分、是以能通病之情矣。

〔訓譯〕

古人の病を診するや、彼を視るに彼を以つてせず、乃ち彼を以つて我と爲す、其れ既に彼我の分なし、是を以つて能く病の情に通ず。

古人之診病也望色不以目、聽聲不以耳、夫唯不以耳目、故能察病應於大表矣。

〔訓譯〕

古人の病を診するや、色を望むに目を以てせず、聲を聽くに耳を以てせず、夫れ唯耳目を以つてせざる故に能く病魔を大表に察するなり。

上に掲げた二箇條は和田東郭の醫則八條中のもので、東郭の遺稿中から取つて、蕉窓雜話の巻首に掲げたものである。

東郭に就いては、先般石原保秀先生が、「漢方と漢藥」誌上に詳細の傳記を發表せられたので、こゝでは單に上掲の醫訓を復唱して、東郭の眞精神に觸れてみたいと思ふ。

東郭は蕉窓雜話の中で、次の様な話を書いてゐる。

『昔し備前の國某なる士、代々鎗の家なりしに、或時其家の主人に甚愚なるが生れ出て、實に朋友の附合の挨拶等も出来ぬ位にて主家への期望の勤も時々は忘るゝ程の人なりしが、其術に於ては妙處を極め、其國の諸流も敢て當ること能はず、且つ其祖にも劣らざる者と一國の衆評ある故、愚なる人なれどもやはり、其術を以つて家を續しめられたり、其愚なるが中にも我術のことには、色々工夫ありて其人平日得ては剛に至て出でること半時或は一時を過ることあること毎々なりし故、後々には家人氣を附け、若し剛の中にて氣を閉ることもやあると、窓より窺見れば、兼てより剛の中へ箒を二本入置ことを工夫しをいて、剛に居ながら、其箒を兩手に構へて左右よりつき合て、鎗を遣ふまねをし

て程よく意に落合時とおほしく、にこ〜と笑時もあり又左もなきかして面に皺して工夫する時もあり、是を以て時を移せども出ず、且つ傍らより人の己を窺ふことを知らず、若し餘り時を移すにより行て食時の過るなどを告る時は始ておどろきて剛を出るなど、云様のことにありしなり。斯様にありてこそ其術も妙處に至るべしと戸田先生の物語して毎々感ぜられて其藝に妙を得たる人あり、是は七歳の時より七十餘まで毎朝未明より起て鞠を蹴ることを怠らず、常に雨天には内にて蹴り天のいまだ明ずして鞠の上より落るの見えざるにもやはり誤らず蹴たりとなり。一藝に名ある人は皆此の如し、銘々我業に勵むことは此の如くこそありたき者なり。』

又曰く、
『庭の樹木を見るにも、山に遊び水に浮び、又煙草盆一つを手に提て見ても、事々物々の中に、自然と我術の工夫の手掛りとなること寓してある者なり。兎角各我業とする一藝にこりかたまりて習熟すべし。必多端なる時は、術の精妙に至ること能はず。若しよく其多端なるを省きて一筋に心を越へしらしめ、これを思ひこれを求むる時は、我相應に見識の開こと

淮南子より

○獸を逐ふ者は目に大山を見ず、嗜欲、外にあれば、則ち明、蔽はる。

○有音の音を聴く者は聾、無音の音を聴く者は聰、聾ならず聰ならざれば、神明と通ず。

○人、龍を御するを學ばんと欲することなくして、皆、馬を御するを學ばんと欲し、鬼を治むるを學ばんと欲することなくして、皆、人を治むるを學ばんと欲す、用ふるある所を急にするなり。

○門を解いて以て耕となし、井を塞いで以て臼となす、人の事に從ふや、時に相似たるあり。

○夫れ人を亂る者は、芎藭の薬本に於ける、蛇牀の藥蕪におけるが如き也、故に劍玉は、劍の莫邪に似たる者に惑ふ。唯だ歐冶のみ能く、其種を名づく。玉王は玉の碧盧に似たる者に眩ふ。唯だ猗頓のみ其情を失はず。閻主は、姦臣小人の君子に疑はしき者に亂る。

唯だ聖人のみ能く微を見て以て明を知る。故に蛇は首を擧ぐることに尺にして、脩短知る可き也。象は其牙を見て、大小論ずべき也。

鍼灸の發生に關する一考察

龍野 一雄

後世は勿論、漢以前に於ても鍼灸と湯液とを併用する人はあつたが、大體に鍼灸と湯液とは各自獨立して別途の流れをとりつゝ發達して來た。その發生の經路も亦鍼灸と湯液とは異なるものがある。鍼灸も亦その起源を同じくしてゐるとは考へられぬ。

十四經發揮の序文によると、往昔は服餌の法をなすものわづかに一二、灸を爲すもの三四なのに鍼を用る者は八九であつたといふが、内經に於ても主として鍼を論じ、灸は傍ら論及するといふ程度である。尤も内經は道家者流の筆鋒を以て論述してゐる事だから、異法方宜論に於ても導引按蹻を中央にとり、鍼は南方より來り、灸は北方より、藥は西方より、砭石は東方より由來すと説いてゐる。此説が果して妥當なりや否やは遽に決し難いが、ただ五種の治療法の發生が夫々經路を異にしてゐるといふ點では頗る暗示に富むものがあるやうだ。秦漢時代の醫學は儒家之に關せず、専ら道家が養性の説を立て、之に與つたから、その代表的な導引按蹻を中央に置き他を悉く四邊に配置せる所以も肯かれる。此時代の支那の醫學は導引吐納法が道家によつて支持され、湯液は恐らく神仙家の手を経て發達したもの、如くである。鍼灸は何人によつて支持されたかは明瞭でないが、少くとも内經成立の紀元前二世紀前後頃には矢張り既道家の手にあつたらしい。否道家によつて大成されたと思はれる節がある。その理由は第一に内經の思想が道家者流（それに漢時代の儒家の思想によつて粉飾されてゐる）であること、經絡に關する觀念の成立が後述するやうに導引按蹻と關係があるやうに思はれるからである。

湯液家と鍼灸家との交渉は傷寒論でも窺へる。然し傷寒論では湯液家が鍼灸家の思想を採入れた點はかなり不完全な不徹底なものであるやうだ。三陰三

陽にしてもその觀念によつて整理し系統立てたといへ、經路と五臟六腑の關係が内經の如くに徹底されてはゐない。又傷寒論の基礎をなす傷寒中風の觀念と經絡との觀念が部分的で片寄つてゐて兩者の間の關聯がどうも徹底してゐない。

鍼灸は鍼灸で金蘭循經乃至十四經發揮に見るやうな系統を以て一貫してゐて、湯液の側からの影響を思想的にも技術的にも殆ど受けて居らぬ觀がある。

鍼灸の發生當初、未だ經絡の觀念なき原始鍼灸術の時代には恐らく疼痛、腫脹等のある局部に對して直接に作用せしめたであらうと思はれる。介達刺戟とか遠達刺戟||反射作用の著眼などは相當技術が進まなければ行ひ難いからである。して見ると、金屬針や艾の發明なき石器時代には砭石温石等による器械的又は加熱冷却等の操作が先づ行はれ、それから鍼灸へと發展したものと思ふべきではないか。内經時代には砭石法が現存してゐたことは原始醫術の名残とも云ふべきであらう。又鍼も古代は太鍼で併かも石製の針もあつたといふから、益以て鍼の發生が奈邊にあつたかは想像に難くない。

艾の發生が針より後れたといふ事の説明には第一に艾が灸に適すること、發見、第二は艾の調製法の發見、第三には簡便な點火法の發見と三つの條件が障礙をなしてゐたであらう。

何故艾が選ばれたかに就ては憶測に過ぎないといへ若干の手がかりがある。博物志の「氷を削り圓からしめ、擧て日に向ひ艾を以てその影を承くれば則ち火を得。艾を氷臺と名づくるはこれこれを以てか」といふのがその一である。この文章は氷片をレンズとして太陽光線を收斂させ、その焦點に艾を置くこととして發火するといふことを説いたものである。艾が點火し易く木燧にも用ひたことは淮南子の高誘註に艾を以て之を承くれば則ち燃えて火を得とあるにより想像される。

蓬については一の手懸りがある。それは蓬を著に該當せしめることで、これは勿論多少の危険

はあるが暫くそれと假定して論を進めやう。著は傳説的な植物で、原植物に就ては異論があるが、叢生し高さ數尺に達する。博物志には「著千歲にして三百莖なり、その本すでに老いたる故に吉凶を知る」といひ、易に著を用ひることは言ふまでもないが其他著に關する神秘的傳説は本草綱目其他に於て必ずしも尠しとせぬ。

蓬の名稱をアルテミスシアといふが、それは古代埃及の女神アルテミスに因んで附けられたものである。古代の埃及やその周圍の西方亞細亞、東部地中海沿岸地方では蓬を病魔除けや吉凶判断に用ひ、藥用としては婦人病に多く使つた。

善を蓬に當嵌ることが正しいとしたらこの古代西方傳説と支那傳説との間に一脈の類似點のあるのを見逃す譯には行かぬであらう。まして蓬は西方でも婦人藥とし、支那でも帶下漏血に用ひてゐるのである。

但し私は古代西方亞細亞の傳説が支那へ流入した、西方が傳説の發生地だといふ見解を持つものではない。たゞ一言したいのは蓬の傳説は印度系と支那系との間に關係がないことで、若し假に西方との關聯ありとせば恐らく西域を通じての交流であらうし、さうなると内經の灸炳は北方より來るといふことも何かの暗示を含んでゐないだらうかとさへ思はれて來るのである。

蓬は點火材料として好適である所へ、他方神秘的な傳説を擔つてゐるので、魔法醫術の古代に於て艾が灸の點火材料にされたと見ても大過はあるまい。鍼灸術が如何なる動機を以て經絡の觀念を擱んだか。

前に述べたやうな局所の直接刺戟のみを扱つてゐては如何に數をこなし、如何に多くの經驗が蓄積されたとして、それは畢竟點の觀念から抜出て線を構成することはあるまい。

然らば線の觀念——經絡は如何なる操作を媒介にすれば著想される可能性があるだらうか。私は二つの動機に氣が附いた。

第一は仰臥位、伏臥位、側臥位になつたとき頭部より足部に至る最高部位を結ぶ線が是である。勿論大體のことではあるが、仰臥位で高位に當るのは陽明經に、伏臥位では太陽經に、側臥位では少陽經に當る。高い所は陰陽說では陽になることは言ふまでもない。この著想が極めて素朴である所に却つて意義があるかと思ふ。

第二には線の觀念を發見し、若くは之を追試し支持する操作として導引按蹻が與つて力があつたと考へる。今日の按摩術にしても筋肉或は筋肉間といふやうに略一定の經路に從つて觸手して行くのである。この方法は學理に從ふよりむしろ患者の自然の要求に應じて經驗的に發見されたものであらう。

十四經絡發揮序文の流注は歴るといひ循るといひ經る、至るといひ、抵るといふのや、出入流注行過といふのも皆動的なもので、經絡の觀念が血氣の循行に結付けられた事も皆動的的操作に關聯して規定されたものでなければならぬ。

導引按蹻を行つたのは道家である。素問を大成させたのも道家である。さうすると聊か三段論法の嫌ひがあるが、經絡の發見には道家者流の力を無諷することが出来なくなる。

經絡の名稱は何時頃から出來たものであらうか。その名稱が易に由來してゐることは改めて言ふ迄もないから、易の發生以後に屬することも亦當然である。それならば易が單なる吉凶の占ひから一步進んで儒家の人生哲學として採上げられ、易が極めて尊重された時代以後に三陰三陽が成立したと考ふべきだから、經絡の名稱確立は先づ秦後半期とするのが穩當であらう。即ち内經の著述を遡る幾何もない頃である。

漢末より五行説や干支の迷信的分子の混入が多く、隋唐に至つてその弊極められる感があるが、金代に傳存した金蘭循經の如きは比較的純粋な實用的な經絡思想を見ることが出来るのは幸ひである。

唐以前の鍼灸書は散逸せるもの多く、鍼灸の發生發達、流派、手技、思想的其調、湯液との關係等について精確なる資料に乏しさを遺憾とするが、側面

よりの考察も亦何かの役をなすかと思ひ茲に簡單な論考を試みた次第である。鍼灸古典研究家の御垂教を得ることが出来れば幸ひである。

黄疽の治驗

龍野一雄

(第一例) 十二月初旬に高熱、裏急後重、粘液便と症狀の揃つた大腸カタルの青年を診たことがある。發病後四日目で脈が浮緩で心下部などは軟く腹滿腹痛はもはや殆どない。桂枝加大黃湯を考へたが實痛がないこと、胃氣弱しと考へて桂枝加芍藥湯を發してみた。二日ばかりやつたが發熱と粘液便は全然不變だ。そこで自利渴せざる者は太陰に屬す。其藏寒有るを以ての故なり。當に之を温むべし、宜しく四逆輩を服すべしを思出し、この人は手足厥冷も自温もな

いけれども裏寒として四逆湯類を使つて宜しいと考へ、脈浮にして遲表熱裏寒下利清穀の者四逆湯之主を參考にして四逆湯を使つてみた。秋頃うちの六歳になる兒の下利に四逆湯を使ひ奏效したので些か自信を持つて處方したのである。分量は一日甘草二〇、乾姜三〇、附子一〇である。服藥一日で粘液取れ同時に解熱しその卓効には我ながら一驚した程であつた。同湯を連服して大腸カタルは間もなく全治した。

所がこの青年がそれから半月ほどして又熱が出たと云つて來たので往診すると熱は三十九度四分あり、鼻がつまつてゐる外には頭痛、照寒、咽痛咳嗽などはなく、粗大右肩胛骨間腔の呼吸音が稍々粗雑なる以外に何等擱へ所がない。恐らく流感であらうと診斷し、脈が浮だつたので、前同に裏寒と認め

た點から桂枝人參湯を投じてみた。すると翌日は熱が四十度四分まで昇り、頭痛、熱感、腹鳴等の症狀が現はれて來た。流感か、腎孟炎か、中心性の肺炎か、肺浸潤の始まりか腸チフスカとつ追ひつ思案したがどうにも症狀が揃つてゐないのを確診を下しかねたので、前に桂枝が行つてゐるのに反つて頭痛が起つたといふ所から桂枝湯を服し或は之を下し仍て頭痛強痛、翁々發熱汗無く心下滿微痛、小便不利の者桂枝去桂加茯苓白朮湯之主をより同方を用ひることにした。然し依然として解熱せず、脈は八〇緊張中等、胸部は右肩胛骨間が呼吸音粗雑で聲音振盪が強い。右の腎臟が觸知され軽度の壓痛がある。胸滿苦満はない。小便に變化がないので腎臟腎孟炎でないことは判つたからどうも肺浸潤の初期の疑ひが濃くならざるを得なかつた。處方は外科の瘰癧といふ意味で柴桂湯に轉方した。翌日赤血球の沈降速度を測定すると豫想に反して一六〇しかなく、透視で胸部に所見がないといふ報告を受けた。しかもその日にはもはや解熱してしまひ、何だか狐につままれたやうな氣がした。

然るに今迄全く氣が附かなかつたが小便が大變赤くグメリン反應が陽性に出た。云ふ迄もなく黄疽を起してゐたのである。普通カタル性黄疽といふと同時に胃腸障礙があるやうに成書には

書かれてゐるが、此人が下利をしたのは今回の發熱よりかなり前のことだ。痲痺様發作もなく、肝臟の肥大もないから膽石、膽囊炎等を考へる迄もなく矢張り單純なカタル性黄疽より外に持つて行き所がない。成る程金匱ばかりでなく傷寒論にも外感によつて起る黄疽を論じてゐるのは行届いてゐると感心させられた。つまり此患者は最初黄疽の所見がなくたゞ流感の如く發熱したが、黄疽の將來性を伏藏してゐたもので、早く氣がつかなくなつたのは手ぬかりだつた。中神琴溪が黄疽なき發熱に對し瘀熱として茵陳蒿湯を使つた燭眼に敬服の外はない。

だが問題は次に使ふべき處方である。普通黄疽には先づ茵陳蒿湯を用ひて後茵陳五苓散に移るやうに淺田宗伯なども教へてゐる。然しこの人は四逆湯が行つた位だから大黃はどうかと思ふ。脈が浮だから茵陳五苓散を使つてみた。應じない。右側に軽度の胸滿苦満が現はれて來たので小柴胡湯に轉したが矢張り應ぜず、そこで思ひ切つて茵陳蒿湯に轉方し茵陳六〇、山梔子四〇、大黃二〇を一日分とした。二日後には黄疽色が稍々薄らぎ便通は泥狀便が毎日三回位で、腹痛はないといふ。脈の緊張がとれて來て軟くなつた。腹部に特別の壓痛を證せず。よつて漸く茵陳蒿湯に落付き其後一週間はかり連用し全く黄疽は消失し尿のビリルビン反應も陰性になつた。

此例で教へられたのは(一)カタル性黄疽は必ずしも胃腸障礙と同時に發現しては來ないが、黄疽の將來性はある。黄疽の初期には不明の發熱だけで定型的な黄疽色を發見し難いことがあり、解熱後反つて著色が著明になつた。

(二)四逆湯が行つたやうな患者でも次の病には大黃劑の適應症が

現はれ得る。内科秘録傷寒の條を見ると「大陰病は素と陽症より來るものゆゑ又本位に復して胃實するものあり、胃實するときは下劑を與ふべし」と書いてある。流石に經驗の深さを窺ふことが出来ると思つた。此患者は前に四逆湯を連服し、恐らく胃實の状態になつてゐたもので、だから茵陳蒿湯で瀉下しても差支へなかつたのだらう。

(第二例) 知人の藥師の方で昨春頃から腎臟炎で柴胡加龍骨牡蠣湯をあげたことがあり其後入院して最近には全く何ともなかつたが暮に急に高熱を發したので往診した。軽い頭痛、惡寒の外大した訴へはなく、高熱の割合に元氣で、たゞ惡寒の時手足が非常に冷えて來て背中がぞく／＼するといふことであつた。脈は浮で滑を帯びてゐるが高血壓の割には軟い。腹壁はむしろ薄い方で胸脇苦満、停水音、下利等はない。既に葛根湯を飲んだやうだ。脈滑にして嘔するといふやうだが、文字通りには白虎湯の症のやうだが、この人はむしろ表熱裏寒のやうに思はれる。そこで桂枝人參湯を薦めておいた。四五日程して復た往つてみると桂枝人參湯は一二回飲んだが應じなかつたのでアスピリン等の解熱劑を飲んでみたけれど依然として高熱が續いてゐるから之は自分で單純な流感ではあるまいと思ふがどうであらうかといふ相談を受けた。然し他覺的所見には胸腹部に變化はなし脾腫も觸れぬからチフスでもあるまい。事によると腎孟炎かも知れないから検査を引締つて來たし發汗後だから類聚方廣義の欄外文章によつて柴桂湯がよいと思ふと答へて辭去した。

其後數日を経て同氏から葉書が來た。

「二回目御高診を願ひ柴桂湯を服

(三)

東亞醫學 第十三號 昭和十五年二月十五日 (第三種郵便物認可)

してより直ちに平熱と相成り、昨日(柴桂湯服後一週間目)やつと離床致し検尿旁々病院にて診察を乞ひ候處一見して黄疽ぢやないかと言はれ昨夕より茵陳蒿湯を服し居り経過次第に良好に候

黄疽の治療法

一、黄疽の治療法はせまいものである。初發に茵陳五苓散をやる人があるが、これは大抵間違ひである。先づ茵陳蒿湯を用ひて下してから、そのあとで茵陳五苓散を用ゆるがよい。黄疽の聖薬は茵陳蒿湯である。茵陳五苓散は手ぬるい薬である。茵陳蒿湯は或は梔子蘆皮湯で病勢をくじい、後、茵陳五苓散を用ふ。梔子蘆皮湯は茵陳蒿湯の症で發熱するものを用ふ。梔子大黃湯は茵陳蒿湯の症にして、懊憹するものによい。しかし黄疽は何れにしても心胸間へかかり少し胸中の氣持のわるいものである。二、大黃硝石湯は腹滿が目的である。茵陳蒿湯は腹微滿であるがこれは眞の腹滿である。三、小柴胡湯は茵陳蒿湯の症にして嘔して胸脇にかゝるものを用ひ、其症の一段と強き場合は大柴胡湯とする。大柴胡湯を黄疽に用ふことは金匱要略にも出てゐないが、經驗上よく聞くものである。四、小建中湯を黄疽に用ふる場合がある。これは金匱に男子黄、小便自利とあるを目的とするが男子に限つたことはない。しかし小便自利のみでは、小建中湯

の證とは云ひ難い。此方は傷寒論の小建中湯證のあるところ、即ち心中悸して煩し、腹中急痛などもありて、黄疽のある場合に用ひて效くものである。五、桂枝加黃耆湯は黄疽の表症あるものを用ふ。茵陳蒿湯の症にして表症のほげしいものには此方がよい。六、千金方に麥苗を用ふる方があつた。生のもので、新に製したのでなければ效がない。苗を絞取り汁を吞ますと效が勝れてゐるが、此方は諸黄疽にて色々としても治せず壞症となつたものを用ふるのである。しかし壞症となつても體力の衰脱せぬ中を用ふるがよい。眞武湯や四逆湯を用ひなければならぬ場合に至つては、最早と效がない。黄疽も後になれば、眞武や四逆を用ひて裏寒を救ふてやらねばならぬ。四逆を用ふる時は常の四逆湯でよいけれども王海藏の茵陳四逆湯を與ふれば、素人醫者や俗醫は満足するものである。其方は四逆湯方中に茵陳を加へたものであるが、茵陳を加ふるは蛇足であつて、常の四逆湯だけでよい。俗間に黄疽にシジミ貝を食するが、これは效のないものである。黄疽で心下痞堅のものには絳藥丸を兼用する。

小柴胡湯	柴胡	三、〇
半夏	二、〇	
生薑	一、五	
黃芩、大棗	各一、二	
竹參、甘草	各一、〇	
大柴胡湯	柴胡	三、〇
半夏、生薑	二、〇	
黃芩、芍藥、大棗、枳實	各一、二	
小建中湯	大黃	〇、五
桂枝、生薑、大棗	各二、〇	
芍藥	二、五	
茵陳蒿湯	茵陳	一、〇
附子	〇、五	
乾姜	〇、五	
甘草	〇、五	
黃耆	一、〇	
右一回量		
大黃硝石湯	大黃、硝石	一、五
梔子	一、〇	

蘇州國醫々院院刊創刊さる

蘇州國醫々院は昨年一月唐慎坊氏等が省長陳則民氏の命をうけて創設したもので、四月十七日に正式開院となつたが、患者増集する者頗る多く、遂に收容困難となり、同年九月十日、現在の景德林に移轉した。同醫院は院長唐慎坊、副院長陳康孫の兩氏の下に、醫務主任董橋泉氏以下十名の醫師が、内科、婦科、幼科、外科、傷科、針科の各科を擔任し、ベット五十を有し、董橋泉氏年來の主張たる漢方醫學の科學化を實行に移したものである。吾人は今回創刊された院刊を通じて、同醫院の抱負、計畫、内容、實績等を知り得るのであるが、大黃、石膏を畏るゝこと、鷓鴣の如く、乾姜、附子を視るゝこと、蛇蝎の如き、一般民衆を指導、啓蒙して、斷乎として仲景の方を投じて、偉效を収めつゝある同醫院の治療方針は、支那に於ける二千年來の漢方醫學の迷妄を打破するものにして、吾人は双手を擧げて、同醫院の計畫、方針に賛成するものである。

院刊は卷頭に湯本求真先生の序文を掲げ、陳則民氏以下四十一名の名士の題字を羅列してゐる。就中、矢數道明、宮本守太郎、大塚敬節氏の本邦人の題字が見えるのは、東亞醫學協會の主張したる漢方醫學に據る日華提携の一斑を表現するものとして、注目に値する。題字の次に圖表があり、この圖表によつて、吾々は同醫院に働く方々の容姿、醫院の内容を知り得るばかりでなく、入院、外來の患者に使用した處方の統計、その治療率、疾病の種類までが一目瞭然として判る。圖表の次に實驗欄があり、こゝには董先生以下の各醫師の實驗例を採録してゐるが、特に董橋泉氏の實驗例は別項に和譯して掲載した如く、仲景の方を縱横無盡に使ひこなしてゐる點に於て、吾々は大きい啓蒙せられるのである。入院僅か數日にして殆んど大部分が全治退院に至つてゐるのを見るに、氏の手腕が如何に勝れてゐる。

昭和十四年度 拓大漢方醫學講座講義頒布

- 一、傷寒論、金匱要略解説(一一六頁) 大塚敬節
- 二、傷寒論、金匱要略階梯(十五頁) 大塚敬節
- 三、漢方治療各論(一〇五頁) 木村長久
- 四、後世要方解説(三十七頁) 矢數道明
- 五、漢方治療各論(六十六頁) 矢數道明
- 六、漢方醫學總論(八十六頁) 矢數有道
- 七、漢方藥物學講義(七十三頁) 清水藤太郎
- 八、漢方醫史學講義(八十一頁) 龍野一雄
- 九、鍼灸兪穴學、治療學講義(一三三頁) 柳谷素靈
- 十、經驗藥方分量集(十一頁)

申込所 東亞醫學協會

東京市牛込區新小川町二ノ七(溫知堂内) 電話牛込(34) 二七七二番 振替東京一一九、四三〇番

るか。判る。
次に言論の欄があつて、此の欄には院長唐慎坊氏の傷寒論の我見以下、數氏の最も進歩的建設的の意見計畫が並んでゐる。
次に研究欄には唐慎坊氏の分類經驗方藥以下數氏の貴重な文獻が見える。殊に陸以梧氏の金匱奔豚病の研究並びに古醫書中の新發現は、吾々に親しみ易い好文字に満ちてゐる。春秋に富む青年醫學家陸以梧氏の前途に幸あれよ。

治療實例

一、張金龍 男 二十歳
住幽蘭巷三十一號

四月二十一日入院
四月二十六日退院

症狀 牙關緊急、直視上竄の狀あり、人事不省にして、兩手拘急し、双拳を堅く握り、呼吸促迫して喉間に喘鳴あり、面色青慘にして、之を呼ぶども答へず、其手を握つて脈を切せんとするに、背んぜずして壁に向つて臥す。齒間を啓いて其舌を視るに、舌苔白く厚く且つ汚濁である。口内には一面に粘痰があり、心下を按ずるに壓痛があり、患者は眉をしかめる。脈搏は沈緊滑數である。其人は某織機店に勤務するに、其人は某織機店に勤務してゐたが、重病だとの知らせで、往つて視ると危険状態なので、早速入院せしめることになつたので、發病の日も、どうして病氣になつたかも、一切不明である。醫家には、望、聞、問、切の四診があるが、問診は以上の如きわけで其要領を得ない。よつて自分は其狀を默察し、其情

譯沈瀾には、大塚敬節著中華民
國醫學界管見、木村長久著漢方
治療各論、大塚敬節著脚氣の漢方
療法、矢數有道著漢方醫學總論、
等を翻譯掲載してゐる。
最後に雜俎欄があり、前後合し
て二百餘頁であり、定價は一元六
角、送料五分であるから、若し購
読希望の方は、二圓位の偽替をく
んで、蘇州景德路、蘇州國醫醫院
宛申込まれるとよい。

葉 橘 泉 著
大塚敬節意譯

を察度し、脈證を參考して、痰
厥の所爲と斷じた。
診斷 痰中昏迷 胃部に痰食の阻
塞があつて、影響が腦に及ぶ。
譯者 葉橘泉(痰は水毒の意)

治法 柴胡加芒硝湯を用ひて、礮
石滾痰丸を下す。看護婦陸蘭女
史に命じて、細心の注意をもつ
て、少量頻回に濯ぎ飲しむ。
經過 服後、立所に、腹中雷鳴あ
り、放屁頻發し、繼いで極めて
悪臭のある大便が下り、精神漸
く明瞭となり、始めて頭痛、胸
痛を覺え、病悶堪え難い状態
である。よつて、再び控涎丹、白
散等を以つて攻め、痰涎の多量
を下し、諸症脱然として失する
如くに癒つた。治癒に至るまで
通計五六日。

案 譯者敬節案するに、柴胡加芒
硝湯は傷寒論の方に、柴胡加芒
痰丸、控涎丹は吉益東洞先生並
ひにその門下の好んで使用せる
峻劑である。白散も亦巴豆を含
有する峻劑にして、傷寒、金匱
の藥方である。現下我邦の漢方
醫家は間々白散を使用するも滾

痰丸、控涎丹を使用する者絶え
ないのだ。
州の一角に屈起して、東洞の方
法を用ひて、醫を起し、生を回
す者は誰ぞ、吾邦の古方家たる
もの、豈に奮起せずして可なら
んや。

二、徐德林 男 五十七歳
住石皮弄四號

四月三十日入院
五月八日退院

症狀 寒熱往來と口渴があり、脈
は數滑にして、舌に黃苔あり、
大便せざるに、既に十二日に至
り、咳嗽を訴へ、胸苦しく、左
胸に刺痛あり、咳をせんとして
も力が入らない。痰は多く、咯
出が容易でない。食せず寢らず、
睡眠不穩にして、右を下にして
臥すことは出来ぬが、右を下に
して臥すことが出来ない。動け
ば氣逆し、午後になると熱が甚
しく上り、四十度を越す。時々
譫語、妄語を發することがある。
診斷 古稱支飲(西醫は肋膜炎と
名づける)

治法 仲景の大陷胸湯
經過 一服にして痛去り痰は滑に
出る様になつた。そこで柴胡湯
に葶藶大棗湯を合して、出入調
治すること一週間にして全癒し
た。

案 譯者敬節案するに、大陷胸湯
は峻劑にして、運用よろしきを
得ざる時は、忽ちにして患者の
命期を促すに至る。故に確實な
る證を把握して、細心の注意を
以つて斷乎たる決意の下に、之
を投ずるのでなければ、漫然僥
倖を期することは出来ないのだ
である。然るに葉橘泉氏が之を肋
膜炎に應用して、數日にして、
全癒に至らしめたるは、氏の非
なる手腕の賜である。大陷胸湯
を一服投じて、その後柴胡湯合
葶藶大棗湯に轉方したるところ
などは、老練家でなければ出来

三、楊發奎 男 三十二歳
紫蘭巷十九號

四月十七日入院
四月廿三日退院

症狀 患者の述べる處によれば、
演習場で軍事教練をうけ、久し
く立つてゐる中に、足が麻痺し
て、忽然として卒倒し、間もな
く寒熱を發し、胸は苦しく、腹
痛を起し、呼吸は促迫し、咳嗽
があり、譫語を發して眠らず、
手指は厥冷し、兩足は伸ばすこ
とが出来ない。脈は沈實にして、
舌に黃苔がある。
診斷 傷寒陽明症にして少陰病を
兼ねたものである。
治法 大黃附子湯。
經過 服藥後、兩脚は伸び、手は
温になつたが、心下が仍ほ痞悶
して咳が劇しい。そこで調胃承
氣湯合厚朴杏子湯を用ひ、出入
調治四五日にして癒つた。

案 譯者敬節案するに、大黃附子
湯は金匱要略、寒疝病の條下に
見える方劑である。余が以下の
如き病人に向へば、大黃附子湯
を使用することに氣付くこと
は、先づあるまいと思ふ。大黃
すべきか、附子すべきかに迷ふ
こと、思ふ。原南陽は、かくの
如き際に、小柴胡湯合四逆湯を
用ひたのではあるまいか。再び
案するに此の患者に大柴胡湯の
みを與へては如何なるものであら
う。

四、郭儒林 男 四十八歳
山東人 胥門大馬路

五月七日入院
五月十二日退院

症狀 大熱、大煩渴、胸悶絶せん
と欲し、呼吸粗暴にして、呼吸
臭穢の匂ひを發し、大便は水液
を下し、心よからず、乾嘔して
吐せんとするけれども出ない。
懊惱煩躁し、反覆顛倒して寸時

和漢藥專門
高島堂藥局
東京市本郷區本郷五ノ五
電話小石川一六五七番
振替東京二五九五三番

東亞醫學協會指定

和漢藥專門

牛黃丸 本舖 紀伊國屋藥店
土田梅吉
東京市神田區花房町二
電話下谷五七番
振替東京三〇八〇五番

和漢藥專門

小島七五郎
小石川區原町十二

江州屋藥局
藥劑師 吉田一郎
埼玉縣深谷町本町
電深谷三一六番
振替東京八一四五番

和漢藥種問屋

植木萬策商店
振替東京二八二二一番
振替大阪五二〇二三番
振替小樽一二四六二番
神奈川縣二宮區内井之口

も安靜にしてゐない。之に加ふるに...

治法 痰液瀦入後、直ちに悉く吐出して、意に湯薬を受入れない...

案 譯者敬節案するに、此證恐らくは瓜蒂散證にはあらざるか...

五、張郁義 男 二十二歳 四月二十八日入院 東美巷九號

症候 咳嗽、貧血、夢精があり、左脇腹に、心臓部にして睡らんとすれば、心臓部跳り、午後熱のぼり、面紅く、心悸亢進あり...

診斷 神經衰弱、感性咳血にして柴胡龍骨牡蠣湯の證を呈す。

治法 連服七八劑にして癒つたので、病者は速に退院を欲した。

六、潘順金 女 十歳 五月十二日入院 土聖巷十號

蘇州の名醫葉橘泉先生を訪ねて

五月廿一日退院 症候 痧疹稠密、色赤きこと錦の如く、唇腫燥痛し、ひどく口渴を訴へ、小便は頻數で舌は鮮紅で猪肝の如く、目は赤く、光を畏む。

治法 大劑の人參白虎湯。經過 二服して熱減じ、腫も亦消散し、渴も漸く解け、静かに眠る様になつた。

本多精一 ひつづ耕作を続けてゐる。余は驛を出て驛前の賣店で電話を借用して葉先生診察所に来蘇の意を預告し、次に黄包車(人力車)を購つて蘇州城に向ふ。

蘇州は上海、南京に至る重要なる物資の集散地として有名で、一方には緑滴る太湖を抱き、他方には廣漠たる沃野千里を望み、其間には多數の「クリーク」を挟み自から天然の灌溉をなしてゐる。農夫等は平和來！の聲高らかに響

○東邦醫學二月號 與亞大業完遂への吾人の分野 刺鍼過誤問題批判 柳谷、保寶、戸部、井上、代田

○漢方と漢藥二月號 支那の漢藥と漢藥商 清水藤太郎

拓大漢方醫學講座 規則書申込次第進呈

○專家國醫士などと書いてある家がある、纏て十五分も経過したかと思つた頃、右側に在る電柱に「國醫葉橘泉」と書いてある看板が眼に入つた、車はこの角から右に僅に這入り約三十米位も行くと突如、止つた、左側に雜病專家葉橘泉診療所と書いてある、早速、余は刺を通じて來訪を報ずれば、葉先生以下門人姓名は診察室にて余を歓迎迎へて呉れた。

北村 幸弘 柳谷 素靈 風鈴 堂 柳谷 素靈 代田 文誌 高橋眞太郎 小椋 章道 石原 保秀 駒井 一雄 龍野 一雄 田中 秋三

柳谷 素靈 石井 陶伯 柳谷 素靈 高橋眞太郎 石原 保秀 龍野 一雄 残されてゐる輕氣道の療法 加 嘉開 竹内 就三 三好 達 梅村 隆保 湯本 求眞

拓大漢方醫學講座 規則書申込次第進呈

かつた、支那人としては珍らしく筋骨の整つた立派な方であつた。その上、温厚、苦敏、多才、學究の極めて熾んで人付きの善い御仁と拜察した。

柳谷 素靈 石井 陶伯 柳谷 素靈 高橋眞太郎 石原 保秀 龍野 一雄 残されてゐる輕氣道の療法 加 嘉開 竹内 就三 三好 達 梅村 隆保 湯本 求眞

柳谷 素靈 石井 陶伯 柳谷 素靈 高橋眞太郎 石原 保秀 龍野 一雄 残されてゐる輕氣道の療法 加 嘉開 竹内 就三 三好 達 梅村 隆保 湯本 求眞

電話大塚一三〇・六七三〇

これで、一般參觀も完了したので

で茲に一同記念寫眞を撮ることに一決し、葉先生初め職員が大廣間に集合し日支醫學の交際を和氣瀟々裡に「シャッター」を押した、時に早や午後二時半頃であつた。

それから、葉先生と余は再び黃包車を驅つて街の中心地にある繁華街の某中華料理店に這入り食事を喫つた、ここで、兩人で老酒を傾けて乾杯をなし、日支同友の健康と發展とを祝して、訣かれることとした、何んでも葉先生は往診多數ありて御多忙の由であつた。

次に余は蘇州を見物すべく城内を一週した後、その夜は觀前街の吳興旅館に一泊することにした、斯くして夕暗迫る頃、城外遙かなる寒山寺の鐘音が風の隙に流れて来る、千古の蘇州も亦深き夜の幕に包まれて行くのである。

翌日午前九時、葉先生は再び余に會ふべく吳興旅館を訪問され、鄭重なる御挨拶を述べられたので余は却つて恐縮の至りであつた、それから余は上海に歸ることになつた。

最後に余の夫蘇に際し葉先生から、左の如き托言がありましたので洵に先禮とは存じますが、誌上に藉りて取急ぎ報導させて戴くことにする。

「葉先生からの托辭」

將來益々貴國に於ける斯界の研究資料並文書の御交換を願ひます、貴國の同友に宜敷く御傳言の程願度

一、日本漢方醫學會各位
東亞醫學協會各位
湯本求真先生
大塚散節先生
木村久先生
矢野道明先生
清水藤太郎先生外一同

桐筆に臨み、余の在蘇中、葉先生一同並に蘇州國醫學院職員の御盡力と御配慮に對して厚く感謝の意を表す。

(完)

虹彩眼炎と灸法

日本眼科學會雜誌七〇九、九六八に於て竹田氏は動物實驗と臨牀經驗とから、痲灸は一種の轉調療法と看做し得べき半面があり、色素移行等は抑制するが、免疫體の眼内移行を促進する事實を認め、「フリクテン」結核性眼炎特に虹彩炎等を適應症とし、線内障等には無効であると報告した。

百日咳

百日咳とは現在の百日咳のことではなく、生後百日前後の乳兒の咳するのをいふ。これは有名な小兒科醫科瀨豆州の幼々家則に出てゐる。

疫利

疫利とは赤痢が重篤で一般に廣く流行した場合を指して云ふ言葉で、此頃の疫利といふ病名は本来の意味を忘れた稱呼である。百日咳を疫利といふのは、百日咳が廣く傳播する咳であるからである。疫の字の意義をよく考へ

治方看的

咳嗽

原因を大別するに、外感より發するものあり、内因、即ち四飲より發するものあり、亦勞より來るものあり、外因によるものは先づ表を治し、内因によるものは飲を驅るが常道なり。亦勞より來るものは勞を治

嘔科、乳科

嘔科とは小兒科のことだ。問診が要領を得ない點は嘔も小兒も同じであるから、かくは命名したものか。

乳科とは婦人科醫者のことだが、東京の町を歩いてゐると電柱に乳科醫院といふ廣告が出てゐる。この乳科は話にし聞けば乳房の疾患を専門に治療する醫院ださうである。

傷寒論と易

古矢知白は傷寒論研究者として、待異の存在であるが、知白は云ふ、傷寒論は股の易である連山の影響によつてなつたもので、周易とは、少し趣きが異なること。

提燈の弓と犀角

提燈の弓を削つて、犀角と稱して賣つた醫者があると、江馬藤渠の藤渠漫筆に見えてゐる。滑石を固めて龍骨と稱するは、まだいゝれ如何。

荒木性次

するが第一なり。而して表を治するが爲には、桂枝、麻黄の如き劑を以て汗を發するが宜しく裏を捌くが爲には半夏、乾姜、細辛、等の劑を用ふるが宜しく、而して小青龍湯越婢加半夏湯等は、表裏を兼ねるものと見做すべきであり半夏厚朴湯皂莢丸等に類するもの

は、主として裏にかゝるものである。

一、女子 三十五歳
産後風邪に罹り仲々癒へず惡寒發熱咳嗽に甚しく醫の曰く乾性肝膜炎なり其證惡寒の後發熱して汗多し咳は激しけれど痰は少し頭痛脇痛あり舌や、乾き良く水を呑む脈は浮數にして微弱なり金匱に曰く

産後風、續之數十日不解頭痛惡寒時々有熱心下悶乾嘔汗出雖久陽且證續在耳可與陽且湯。
思ふに、産後風を得て癒へざるは正に桂枝の證なるべしとして、桂枝湯を與へんとす、翻つて考ふるに、脈微弱にして汗を發するに應ぜず、即ち陽なきものとし桂枝二越婢一湯を與ふ、三帖を服し殆んど癒ゆ。

桂枝二。越婢一湯方
桂枝、芍藥、甘草、各〇、七五瓦、生姜、一瓦、大棗、一五瓦、麻黄〇、七五瓦、石膏一〇、五瓦
水一合を以て、先づ麻黄を煮一沸し、諸藥を入九勺となし滓を去り、溫服二回。

一、一男子 四十八歳
長年の喘息にて苦しむと云ふ、その證、咳嗽甚だしく痰多く出て胸中一つばい、に寒り息なし難しと、又冷症にして小便近しと、即ち裏寒氣の逆と見て、人參湯を與ふ、三日にして癒ゆ。

人參湯方
人參、甘草、朮、乾姜 各三、〇
右水一合六勺を以て煮て六勺となし、滓を去り、分温三服す。

一、一婦人 三十五歳
平生喘息の氣味あり、其始めは、婦人科手術を受けし後なりと云ふ、其證發熱惡寒、汗出て、咳甚しく痰き痰頻りに出て、息苦しく、咽嗑せし夜睡ることを得ずと、脈を案するに浮にして數。
金匱に曰く

東亞醫學協會幹部

漢方各大家の合議研究製劑

である故原料の精選と處方の的確は絶對他の追従を許さない

本劑は一時押への局處的藥劑ではなく胃腸の活力を健康と同じ様に恢復させる特點があるあらゆる胃腸藥にも満足しない場合にこの皇醫胃腸藥は最後の良藥としておすゝめする。

45錠	50
105錠	1.00
375錠	3.00

株式會社

東亞醫學協會研究製劑

肺脹軟而上氣煩燥而喘脈浮者心
下有水小青龍加石膏湯主之
要するに脈浮なるものは病外にあ
り、痰多く出で胸中苦しきは、必
ず水心下にあるべし、即ち表裏を
兼ねたるもの、如し、痰多くある
に拘らず渴してよく水を呑み舌上
や、乾燥し煩燥の状と合して石膏
の證を思はしむ、即ち小青龍加石
膏湯を與ふ、服すること未だ三帖
に至らずして頓に安し。

小青龙加石膏湯方
麻黃、芍藥、桂枝、細辛、甘草
乾姜、五味子 各三〇、半夏
五〇、石膏二〇
右五味水二合を以て先づ麻黃を入
れ煮立ちたる時諸藥を入九六勺に
煮詰め、三回に温服す。

一、一女子 二十九歳
咳の藥を乞ふ、其證、晝少く夜
劇しく時々發作し嘔吐せんとする
に至る、即ち半夏厚朴湯を與ふ、
一服にして愈ゆ。

本方を劇しき咳に用ひたるは
恩師湯本先生の發見にかゝる、
應用の妙至れりと云ふべし。

半夏厚朴湯方
半夏一〇〇、厚朴三〇、茯苓
四〇、生姜五〇、柴蘇葉二〇、
右五味水二合を以て八勺に煮詰め
滓を去り、四回に分ち温服晝三回
夜一回。

半夏厚朴湯は咳甚しく出始める
時は仲々止まず、嘔氣を催すが如
きものに甚だ效あり、夜多く出る
咳にも效あり、此等も咽中痰鬱の
變形と見做すべきものならんか。

刺戟過誤の問題

本誌上に於て問題となつた刺戟
過誤の問題は東邦醫學二月號に於
て、再び粗上にのぼり、既に本誌
に發表せる龍野、柳谷、代田、戸
部の各氏の論文を轉載し、新に柳

谷、戸部、井上の諸氏が更に論陣
を張つた。
第三者の立場より之を眺むる時
は、今少し此問題が謙虚に、學術
的に展開されることかぞましか
つた。ジャーナリスチックに、興
味本位に此問題は取扱はれるべき
性質のものではないと思ふ。

アジヤ本草學會 設立さる

此程、伊澤凡人、吉田一郎氏等
を中心とし、清水藤太郎、栗原廣
三氏を顧問として、アジヤ本草學
會が設立されたよし。同會の將來
に期待し、發展を祈る。

「醫道の日本」の 躍進

第三卷第一號より「醫道の日本」
は大躍進をなし三十頁餘の堂々た
る月刊雑誌として體裁成り執筆者
も亦一同眞剣味溢るゝ寄稿をなし
てゐる。切に御健闘を期待する。

本誌購読料納入者 芳名

- 一金五圓也 山梨 渡邊礎美氏
- 一金二圓五十錢也 東京 市川もと氏
- 一金一圓二十錢也 東京 三村靈峰氏
- 東京 廣野貞助氏
- 山形 佐藤喜一氏

本協會五週年 紀念事業相談會

皇紀二千六百年紀元節、この日
本協會理事清水藤太郎、矢數道明
矢數有道、龍野一雄、大塚敬節、
柳谷素靈、木村長久、氣賀林一八
氏は午後三時半向島言問橋に集合
して常泉寺の張仲景の碑に參拜し

紀念撮影をして料亭隅田に入り本
協會五週年紀念事業の打合せ相談
會を催した。
協議事項は大體左の通りであつ
た。

- 一、本協會に食養學の部を設け
小出壽氏主任擔當を得たる事、其
他の
- 一、漢方醫學叢書刊行の事。
節氏就任決定。
- 一、本協會に食養學の部を設け
小出壽氏主任擔當を得たる事、其
他の

矢數道明著 漢方醫學處 方解說

菊判三百二十頁洋布裝
目次
一、二、後世要方解説
前後篇
第一、香蘇散類
第二、平胃散類
第三、二陳湯類
第四、四君子湯類
第五、四物湯類
附 録
一、補中益氣湯に就て
二、歸脾湯の運用に就て
三、漢方醫學參考書案内
四、急性化膿性頸部
淋巴腺炎の治驗
五、舌病瘡口瘡眼病
の治驗
六、金元李朱學派に就て
七、國幹淺井篤太郎
先生を懷ふ

和漢洋病名一覽 九、主治方直訣 内外治療(一月號)

- 一、醫藥分業の根本檢討 野村佐一郎
- 一、結核治療の要領 水口 耕治
- 一、眼結核の治療と養生法 山崎 順
- 一、血管病の常御藥田中吉左衛門 柳谷 素靈
- 一、肺 結 核 奥山 謙藏
- 一、鍼灸と小野寺壓點に就て 馬場 和光
- 一、畜膿症の治驗 柳谷 素靈
- 一、結核性疾患の鍼灸治驗 代田 文誌

編輯後記

○雪の朝、編輯を終る。本誌には
軍醫中尉本多精一氏の書翰を採録
することが出来た。別項掲載の蘇
州國醫醫院々刊の紹介と併せて讀
まれたい。

○支那語の出来ない小生が、葉橘
泉氏の治療實例を和譯して掲載し
た。これは今後數號にわたつて連
載の豫定であるが、若し誤譯によ
つて原著の意を誤り傳へる様な處
があつたなら、原著者並びに一般
讀者に深くおわびしなければなら
ない。

○龍野氏の黃疸の治驗は前月號締
切直後にいたゞいてあつたもので
鍼灸の發生に關する一考察は、特
に本誌のために御執筆下さつたも
のである。

○矢數道明氏は御多忙中の處
を、無理に御願ひして、治驗例を
いたゞいた。(次號掲載)

○黃疸の治療法は、小生が東郭の
所説を參考にして編んだもので、
龍野氏の治驗と併せて讀んでいた
ゞきたいと思ふ。

○今月號は例會を休みます。われ
は、日下餘りに多忙でありすぎ
る。來月は大方目新しい處を皆様
にお目にかけられることと思ふ。
(大塚生)

故小林秀悦著
大塚敬節校註

長沙瘍方

正價二圓
送料十錢

悪性骨膜炎、腫物、横痃、るいれき、打撲、金
傷等々現代的に手術を必須とする疾病を、漢方
的に非觀血的に湯藥にて治する法を述べたもの
加ふるに大塚先生校註の豪華版である。

發行所 拓大漢方科同志會
東京市京橋區根町不二ビル内
取次販賣所 日本漢方醫學會
振替東京六六七七番

胡元慶著
柳谷聰碩序
山田素琴譯

癰疽神秘灸經

全一册寫版印刷用 定價金 壹圓 五拾錢
紙上質和紙、紙數六十 送料 市内六錢 地方十錢
餘頁・插圖十八葉

癰疽(腫物)は悪性良性に拘はらず大體手術するも
のと考へられる現今に本書の如き非手術的に手輕に
灸に依つて、治療せしむる法を斯くも明快に説いた
書物が、我が鍼灸醫學の古典中に存在する事は誠に
喜ばしき限りであり、灸の再認識を叫ばれるのも宜
なるかなと思ふ。

本書の如く運用せんか、それは病者の苦痛を救ふ
はもとより經絡の有機的存在を、如實に體得し術者
をして經絡の面白さに雀躍せざるを得ない境地に至
らしめるであらう。鍼灸家は云ふも更なり洋醫家と
雖も一本を座右に置かれ十四經絡(經穴)の運用を體
得されん事を。

發行所 醫道の日本社

振替東京一六三五四一番